

8) 学童の身体発育からみた永久歯萌出と齲蝕罹患に関する歯科保健学的解析

○相澤 徳久, 結城 昌子¹, 鈴木 康生
(奥羽大・歯・成長発育歯, 衛生)

【目的】本研究は学童における身体発育, 永久歯萌出ならびに齲蝕罹患についてコホート調査を行い, 身体発育状態からみた永久歯の萌出時期と齲蝕罹患性との関連性を分析した。その結果をもとに, 歯科保健学的に個人単位あるいはグループ単位での効果的な齲蝕予防の指標を確立することを目的として解析を行った。

【対象および資料】郡山市内の小学校の学童で平成4年から平成12年の間に1年生から6年生まで経年的に観察できた男児215人, 女児158人, 計373人を対象とした。

【方法】調査は当講座所定の診査録を使用し, 口腔内診査は教室内において十分な自然光の下で歯鏡, および探針を用いて行い, 永久歯, 乳歯ともに現在歯, 未処置歯, 処置歯, 喪失歯について記録した。身長, 体重, 座高等は毎年度実施されている定期健康診断票の原簿をもとにした。

【結果】1) 萌出歯数は, 男児で身体発育の順に高い傾向を示し, 身体発育と永久歯萌出との間に正の順位性が認められた。一方女児ではその傾向が認められなかった。2) 齲蝕の罹患性では, 各群別に6学年のDMFT指数および歯率と身体発育との間で男女児とも有意差が認められなかった。3) 男児は上顎側切歯, 女児では上顎第一小臼歯において, 「身体発育と萌出学年別の6年時DMFT指数」, および「当該歯の累積萌出者率」のいずれにも統計学的有意差が認められた。また, これらの歯種については, 早期萌出群に高い齲蝕罹患性が認められた。

【結論】今回の分析から, 学童期では男児, 女児それぞれに特徴的な永久歯の萌出が認められたことから, これらに着目して効果的な齲蝕抑制を図る可能性が示唆された。

9) 歯周サポート治療患者の実態調査

○鈴木 史彦, 大谷 裕亮, 築館 勇樹
大島 洋志, 塚本 康巳, 池田 祥恵
山口 英久, 中山 大輔, 岡本 浩
(奥羽大・歯・歯科保存)

【目的】本研究は奥羽大学歯学部歯科保存学講座(歯周病学分野)で担当した歯周サポート治療(SPT)患者の実態について, 継続的リスクファクターの観点から評価したものである。

【被験者および方法】2005年6月から8月までの3ヵ月間に来院したSPT患者205名(男性96名, 女性109名, 平均年齢58.7±9.2歳)を対象とした。継続的リスクファクターの診査項目はLangとTonettiの方法(2003)に準じた。すなわち, プロービング時の出血の割合, 4mmを超えるポケットが残存している部位数, 全28歯からの喪失歯数, 骨吸収と患者の年齢の比率, 全身的・遺伝的な状態(aggressive periodontitisや糖尿病の有無), 環境因子として喫煙の有無や本数を評価した。パラメーターごとのカテゴリー分類から, 被験者を低・中・高リスクグループに振り分けた。

【結果】今回の調査を行った205名のうち, 低リスクグループは38.0%, 中リスクグループは44.4%, 高リスクグループは17.6%であった。最もSPT期間が長いものは13年であった。BOP, 4mmを超えるポケットの部位数, 喪失歯数は低リスクグループと中リスク以上のグループ間で有意差がみられた。Aggressive periodontitisや糖尿病は高リスクグループと中リスク以下のグループ間で有意差がみられた。骨吸収と年齢の比率, 喫煙は各グループ間で有意差がみられた。

【考察】高リスクグループはSPT期間中のBOPや残存するポケットよりも, 全身的・環境的因子の関与が強いと考えられた。

【結論】今後は糖尿病や喫煙の状態が他のリスク項目にどのように関与するのか, また同じリスク分類の患者でもSPT間隔の違いで各リスク項目に差があるのかを分析していく予定である。